

＜さあ、帰りましょ＞前号で雪に残ったマガモたちの宴の跡を紹介しました。最近が多いときには7カップルものマガモたちがビオトープにやって来ます。慣れてきたのか池から上がって上流にある小さな池(水溜り)の周りや枯れ草の原っぱで遊んでいます。写真(右)は宴も終わりメスを先頭にして一列にご帰還のところですよ。



＜雪の恵み＞ドングリは相変わらずビオトープの斜面一帯に散らばっています。虫や小動物にもあまり食べられておらず一体どうなるものやらと思っていました。ところが発芽し根をおろしているものがこの1週間ほどの間に俄かに見られるようになりました。地表に転がっているものまでが2月半ばの大雪で十分な水分を得たからでしょう。



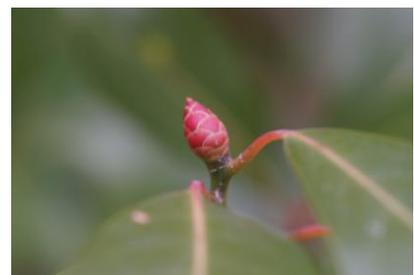
＜発芽したドングリ＞

＜近づく春＞寒い中にも日差しには春の気配が感じられます。ドングリだけでなく植物たちはその気配を感じとっているようです。霜を被りながらも花を付けているホトケノザがポツリポツリと見られるようになりました。ノバラも葉を落とすことなく新芽を膨らませています。



＜ホトケノザ＞

＜なんじゃもんじゃ＞常緑の木々は落葉樹に比べ新芽を出すのがぐんと遅いと思っていました。しかしノバラだけでなくヤブニッケイも芽を膨らませています。艶々した葉の付け根にある赤い芽が目立ちます。春からの華やぎの中では目立たず、クスノキやタブノキほど堂々とした感もなくあまり馴染みのない樹です。ニッケイ(肉桂、ニッキ)ほどの良い香りがしないので“ヤブ”がついたとのこと。 “ヤブ” はやはりあまり芳しくない接頭語のようですね。またこの木にはナンジャモドキという別名があります。“モドキ” が付いていますからやはり“ナンジャ”(注)ほど由緒正しくないのかと思ってしまいます。(注) “ナンジャモンジャノキ” はヒトツバタゴを指



＜ヤブニッケイの芽＞



すことが多いものの特定の樹木の名前ではないとのこと。ハッキリしない木の名前の前半分とその後“モドキ”を付けられてはヤブニッケイも可愛そうです。

←＜ほだ木から顔を出したシイタケ＞
 ＜雑木林に似合うもの＞ビオトープの一郭にコナラのほだ木が置かれていてシイタケの赤ちゃんが幾つか姿を現してきました。ここ最近のことですからやはり雪の恵みを受けたのでしょうか。もう少し大きくなったら「さっと焼いて醤油を一滴…」なんて思ってしまいます。それにしても手入れの行き届いた里山の雑木林には“シイタケのほだ木”や“ミツバチの巣箱”が似合うと思いませんか。(文と写真：松本正勝)